学び　発見

学生が少人数クラスで学びあうゼミナール活動では議論を重ねながら、アイデアやモノを形にしている。学外に飛び出し調査や聞き取りをし、また、ゼミ内で意見を交換したり教員の助言を受けたりすることでさまざまな発見が生まれている。

発想・企画力やプレゼンテーション能力を磨こうと、学外の大会に参加するゼミも多い。2016年度の活躍の一部を紹介する。

経済・泉ゼミ

根室の雄大なフットパスづくり

開通記念ウオーキングも企画

環境経済を考える活動をする経済学部・泉留維ゼミ（志摩勇斗ゼミ長・経済3）は、2年がかりで北海道根室市のフットパス新コースの整備を行った。フットパスは自然や街並みをそのまま楽しむ歩行専用道。昨年9月には、現地で地元の人々を招き完成ウオーキングイベントを開いた。

英国発祥のフットパス（Foot Path）は、歩くことで地域理解をしようと近年、日本でも整備が進み活動が活発化している。

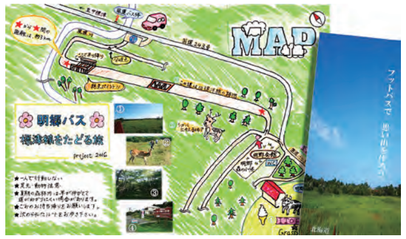
根室フットパスを管理・運営しているのは地元の酪農家集団ABIMOBIT。泉教授がワークショップでメンバーと知り合い、「フットパスを通して環境保全の大切さを認識してほしい」と2010年から泉ゼミが根室フットパス整備に参加を始めた。

今回、ゼミ生が整備に尽力したのは同フットパス明郷コース。1989年に廃線となった旧国鉄標津線の線路跡を活用し、JR厚床駅から北へ途中の伊藤牧場＝MOBIT事務局長の伊藤泰通さん（52）経営＝にも寄り、参加者はフットパスを存分に楽しんだ。

志摩ゼミ長は「イベントは力を合わせて成し遂げ貴重な体験となった。コース整備を『さくやった』と地元の人から喜ばれ、うれしかった」と笑顔を見せた。

伊藤さんは「根室フットパス整備への参加は、大学生として泉ゼミが初めて。若い人の感性に刺激された。今後も一緒に活動できたらいい」と話した。

※根室フットパスは、厚床コース（10・5キロ）、初田牛コース（13・5キロ）、別当賀コース（18・5キロ）があり、明郷コースの完成で全4コースとなった。



作製したコースマップ

学生と根室市民が一緒に明郷コースを歩いた＝2016年9月のウオーキングイベントで

経営・渥美ゼミ

3大学と共同 スマホアプリ開発

「モバイル情報通信サービスビジネスプラン」がテーマの経営学部・渥美幸雄ゼミが、3大学と共同でスマートフォンのアプリを開発、12月21日に生田キャンパスで発表した。渥美ゼミ以外はみな理系。

公立はこだて未来大学、神奈川工科大学、法政大学と合同の「ミライケータイプロジェクト」（総勢39人）。リーダーの下河美咲さんをはじめ3年次生7人が、二つのアプリの開発意図や収支計画などを発表した。

スマホで連絡先や写真を交換する際、握手やハイタッチなど体の動きでデータを送受信するアプリ「Motion Share」と、カフェの空席を有効利用するアプリ「Revive Seat」。このうち空席利用アプリは、カフェで客自身が相席する人を探すサービス。2人掛けの席を1人で占有するなど、空いていても座れないデッドスペースに着目した。

「モバイルバッテリーを借りたい」など相席の条件を入力し、希望者を募る。既にカフェで席に座っている人、これから来店して席を確保したい人の双方が利用できる。

下河さんは「むだを価値に変えたかった。シェアリングエコノミー（SNSを通じ個人間でものやサービスを貸し借りしたり、共有したりする）を意識した」と話し、2、4年次生からは「コミュニケーションツールとしても使える」と好意的な声が上がった。

収益源は、同サービスを利用して来店した客の購入代金の10％。「カフェの負担が大きいので

神奈川工科大生と息の合った発表を見せた渥美ゼミ生

は」という懸念には「客数の増加で貢献できる。サービス利用者の消費動向を解析し、マーケティングのデータとしてカフェに有償で提供することも考えている」とした。

神情協ITコン 3グループ入賞

IT業界の未来を創造する新斬なアイデアを発表する「学生ITコンテスト2016」（最終選考会11月29日・横浜市、神奈川県情報サービス産業協会主催）で、本学の渥美ゼミグループなど3グループが入賞した。テーマと代表者は次の通り。（敬称略）

▽「Motion Share」（代表・下河美咲）▽「地域農業活性化プロジェクト～植物図鑑を味わい尽くせる複合施設」（仁木朋美・ネットワーク情報3）＝本紙1月号に関連記事掲載▽「自分達だけの動く卒業アルバム」（代表・小野塚隼人、ネット情報3）

経営・一ノ宮ゼミ

会計を身近に

「小説チーム」がコンペで最優秀賞

会計学を学ぶゼミナール対抗の研究発表大会「アカウンティングコンペティション」が12月18日、日本大学商学部キャンパス（東京都世田谷区）で開かれ、経営学部・一ノ宮士郎ゼミの「小説チーム」（3年次生6人、及川尚人代表）が最優秀賞を獲得した。

同大会は会計学教育の活性化を図ろうと日本大学の川野克典商学部教授が中心となって今回初めて開催された。13大学から23ゼミ38チーム172人が参加。本学からは経営、商両学部の5ゼミ7チームが出場した。

「小説チーム」は、「小説を読んで会計を身近に感じて」と、図書館生田分館に『下町ロケット』（池井戸潤著）、『トッカン―特別国税徴収官』（高殿円著）など会計にかかわる小説8作品を展示。本の横にはあらすじや読みどころを記したPOPを置き、手にとってもらうよう心がけた。

発表大会では一連の活動を発表。プレゼンテーション力、研究の切り口の斬新さが審査員から高い評価を得た。

同チームの福岡美咲さんは「6人が力を合わせた成果が実ってうれしい」と喜びを表した。

賞状とトロフィーを手に笑顔の「小説チーム」

文・川上ゼミ

SHOW 11号発行

特集「日本×世界」

現代文化について学ぶ文学部・川上隆志ゼミでは、毎年、雑誌『SHOW』を発行している。今年度は石井香澄編集長（3年次）を中心に2・3年次生28人が、企画、取材、撮影、紙面レイアウト、校正といった編集作業に取り組み、第11号（A4判・112ページ）を昨年12月に刊行した。

特集は『日本×世界』。外国人へのインタビューを通して見えるもの、日本各地を訪ねて再発見したもの、世界で注目されている日本料理など、日本の文化と食の魅力を30〝にわたって紹介した。

副編集長の平間美帆さん（3年次）が力を入れた記事は和食の魅力を伝える『@京都』。「京料理木乃婦」（京都市下京区）を取材し、「だしのうまみを『UMAMI』として世界に発信する取り組みなど、興味深いお話を伺うことができた」と笑顔で話した。

今号はデザインにもこだわった。特に表紙は「ゼミ生全員からアイデアを募り、新しいイメージを目指した」とビジュアル代表の栗原栞さん（3年次）。文字を減らし、表紙と裏表紙をつなげると1枚の作品になるなど、工夫を凝らした。

埼玉県小川町の手すき和紙の細川紙を作り続ける職人の姿を伝える『@埼玉』では、ページの背景に和紙の模様が。石井編集長は「取材で〝紙漉き〟を体験。出来上がった和紙を利用した」と説明した。

巻末の日本語学科と日本文学文化学科のゼミや教員を紹介する『日語日文コラボ』は他ゼミの学生からも好評。仲田奈々さん（3年次）がレイアウトを担当した。ほかにも、一人で鳥取県まで取材に行った渥美汐梨さん（2年次）、『α波ミュージックの秘密』など多くの記事を担当した高田沙季さん（3年次）ら、全ページにゼミ生の雑誌作りへの思いが込められている。石井編集長は「『@』のなかで、何か一つでも心に響くものがあればうれしいです」と話した。

入手希望者は、生田キャンパス10号館の川上隆志研究室へ。

完成した『SHOW』を手にする川上ゼミ生

金沢の伝統工芸を紹介した『@金沢』。華やかなデザインが目を引く

商・岡田穣ゼミ

学会HPに用語集作成

委員長特別賞を受賞

商学部・岡田穣ゼミが2016年度の日本海岸林学会表彰委員会委員長特別賞を受賞した。学会ホームページ（HP）をリニューアルし、海岸林についての用語集をはじめとした一般向けの項目を整備したことが評価された。東京都市大学環境学部の研究室との合同プロジェクトで、岡田ゼミからは3、4年次生12人が表彰を受けた。

飛砂害や潮風害の防止、津波減災などの目的で全国の海沿いに整備されている海岸林。ゼミ生が分かりやすく解説し、用語集に採録したのは450語に上る。写真や参考文献も多数掲載し、海岸について知る手がかりをふんだんに紹介している。

2014年度、同学会に所属する岡田准教授（統計学、森林科学）のもとで研究が始まった。今では豊富な知識を持つゼミ生だが、海のない土地出身の学生も多く、「海岸林ってなに？」というところからスタートした。岡田准教授は「社会に出れば自分の専門ではないものを扱うことも多い。その場合にも活用できるプロセススキルを学んでほしい」と狙いを語る。

ゼミ生は、当時の学会HPの内容について会員にアンケートを実施。その結果、学会員以外に向けた情報が求められていることが分かり、海岸林の基礎知識と用語集、東日本大震災関連情報を掲載することとした。

15年からは東京都市大学環境学部吉崎真司研究室（緑地環境システム）とチームを組み用語集の作成・編集が始まった。初頭合わせは湘南海岸砂防林を視察した。「それまで文献の中だけで捉えていた海岸林の役割が実感として認識できた」と新井有紀栞さん（4年次）らは手応えを感じた。

用語集には、自然科学が専門ではない専大生にとってはなじみのない専門用語が並ぶ。常田武史さん（3年次）は「自分たち自身がしっかりしないと進行しない」と準備を重ねて毎月の合同ゼミに臨んだ。

学会の会員である大学教員や研究所員、行政の担当者ら専門家に写真提供や用語集の内容確認を依頼するなど、事実確認を徹底。10月の学会特別賞受賞後も、ゼミ生全員でHPの編集作業を続け、16年末に完成にこぎつけた。

藤原圭汰さん（3年次）は「プロジェクトに携わることで海岸林のことを深く知り、興味が広がった。会員だけでなく、多くの一般の人に見てほしい」と語った。

【日本海岸林学会HP】http://jscf.jp/

表彰された岡田ゼミのメンバー

HPリニューアルについて意見を交わす

KUBIC企業賞

新生児見守りカメラを提案

商・石川ゼミ

全国の学生がベンチャービジネスプランを競う関西府）が提示した「病院とシナジー（相乗効果）が生まれる事業の展開」に挑戦し、企業賞を受賞したのは、3年次生の岩下友香さん、住野将磨さん、富澤由奈さん、石倉泰雄さんのチーム。

産婦人科医院で新生児室のベッドに小型カメラを設置し、病室や自宅などを離れた所から様子を見ることができる「ベビキャメ」を提案した。いつでもどこでも赤ちゃんを見ることができる利便性と、セキュリティーによる信頼性が成功のカギとまとめた。

「需要がありそうなのに導入しているケースはほとんどなかった」（岩下さん）ことに着目して大会の協賛企業である株式会社日本経営（大阪保護者から聞き取り調査を行い「あったらいいね」という声が多く、背中を押してもらえた」と富澤さん。住野さんは「電子機器の知識が乏しく採算計画には苦労したが、プランを練るのは楽しかった」と語る。

6月に応募し、書類選考を経て10月に表彰式があった。12月には日本経営の新人研修に招かれ、入社予定の約30人を前にプレゼンテーションを行った。「カメラは赤ちゃんの負担にならないか」「サービスとして確立するには地域差があるのでは」など指摘が相次ぎ、回答に苦慮する場面もあった。

プランはまとめたら終わりではない。さまざまな角度から見直すことが必要――。改めて気付いたメンバーは、更なる努力を誓った。

企業賞を受賞した住野さん、岩下さん、富澤さん（左から）